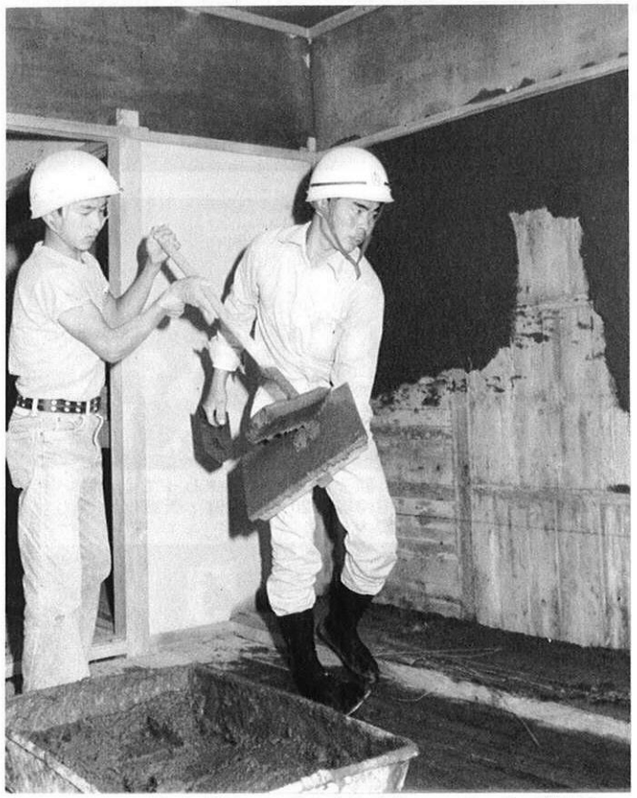
ある青春

★カメラ訪問

“壁”への挑戦

熊本市大江町渡鹿　野村豊君



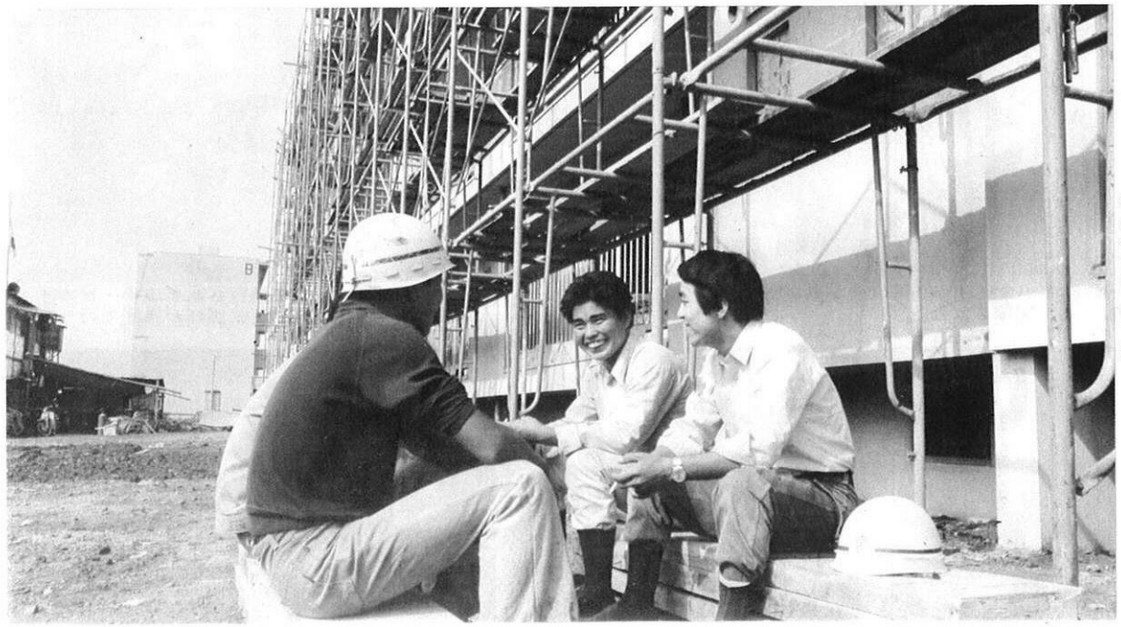
▲セメントを受けて、それをかなりのスピードで壁にぶつつけていく野村君(右)。

たくみな手ぶりで、壁にセメントを塗って行く野村君(20)の赤くほてったほほに、汗が流れる。39年春、免田中学を卒業して、熊本市の上内工業所へ入所。「まじめですね」とは、指導している上内さんや仲間たちの野村君評。

努力家である。現場での仕事と並行して、4年間にわたる事業内職業訓練所での努力の積み重ねが、ことしの7月、日本代表として参加した、ベルギーでの技能オリンピック国際大会の左官部門5位入賞にもつながっている。「やればできる」という意欲を、若い仲間に与えた意義は大きい。

まだ、どことなくあどけなさの残っている顔に、太く濃いマユが意思の強さを思わせる。「暇な時は、仲間とボーリングに行ったり、ドライブするのが一番の楽しみ」と子どもっぽく笑う彼。仕事を終え、流れる汗をふきながら若い仲間と談笑する彼の顔には、精一杯に働いたもののさわやかさがある。「仕事は楽しいです」「技術は、まだまだ未熟、これからも一段と学んでいきたい」。少ないことばの端にも、技能士として、左官の仕事に生きるよろこびと意欲がのぞく。

きょうも、野村君は壁面との対話に、たくましく青春をぶっつけているのである。



◀激しい斗いが終ったあとのくつろぎ…。彼の仲間はみな若く、そして明るいのだ。

話のくずかご

熊本の観光を考える（その3）

宝塚雑感

牛島盛光（熊本商大助教授・熊本県観光審議会委員）

五年ぶりに宝塚を訪れた。「細川家名宝展」の仕事の手伝いのためである。前回は宝塚ギャラリー開館記念展「美しき日本博」に熊本の誇る文化財を展示・解説したときで、天下の志野、織部、唐津の名陶に決して負けない実力を八代焼、小岱焼が示してくれたのもそのときのことであった。特に、県外に、はじめて進出した弁慶ヶ穴装飾古墳（山鹿市）の大型カラー写真が、隣に並ぶ肩していた姿法隆寺の壁画写真と堂々比も、いまなお記憶に残っている。

開会式の挨拶で、細川護貞氏が「さきに、このギャラリーで前田家名宝展が開かれたそうだが、若し今回の展覧会がそれと比較されるとしたら、出品物の上に自らにじみ出ている両家のイエの性格の違いに気付かれることでしょう……」と巧みな紹介をされたが、列品の数々は確かに細川家の特異な性格を表徴している。幽斉（藤孝）三斉（忠興）、ガラシヤ夫人の遺品、重賢の自然科学的関心の所産、武蔵晩年の遺品、墨跡（松井家特別出品）のなかには、前田家百万石が表徴する同家の豪華オンリーとは一寸違った「生きることのきびしさ」を感じさせる何ものかがある。

さらに、関西方面の招待者が会場を回りながら放つ嘆声を耳にしながら思ったのは、熊本人の欲のなさということだった。なるほど、年一回開かれている細川家家宝展で一部の県民は承知しているが、常時展示の施設を持たない熊本では、細川家名宝に限らず、県下に広く分布所在している多種多様の美術品に接することの如何に少ないことか。

最近、美術館建設のことが、次第に具体性を帯びて来たことは喜ばしいことである。宝塚ギャラリーに展示された品物の中には、さきごろ盗難に遭った北岡自然公園の御蔵からのものもある。これなど無事かえって来たからいいようなものの、美術館があれば、未然に防げた事故とも言い得よう。他所から来た専門家を案内して、県内のコレクターを訪ねることがあるが、中には「美術館で責任をもって預っていただいたらいいんだが…」と言葉を濁しながら、たとえ研究のためとは云え、自宅訪問の迷惑さを表明される方もある。

本号の執筆テーマは「観光と文化財」という事であった。自然の恩恵を蒙る山川、島、海にはそれぞれ、阿蘇、球磨川天草等があり、伝統を誇る熊本城等があり、本県はまさに第一級の観光資源県であることに異論はなかろう。然し、これらの観光資源は、どちらかと言えば(県)外貨獲得用の観光資源なのである。そしてまた観光当局（県・各自治団体）の目も自ら観光外政に開かれているような気がする。私は県民の一人として、その目をもっと観光内政に向けていただきたいと思う。

あの千金甲装飾古墳のように、世界的文化財でありながら、数年前の破壊以来非公開の憂き目を見ている美術資料を、美術館の一室にそっくり移したらというどえらい発想も一部にはあるが強ち理解できないこともないのである。

（カット・田上　和）